

氏 名 : 中村 麻由子
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 243 号
学位授与年月日 : 平成 27 年 3 月 17 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 教師が子どもを見るということ
— 共感的・ケアリング的なまなざしの実践的意味 —
論文審査委員 : (主査) 教授 岩川 直樹
(副査) 教授 横尾 哲生 教授 犬塚 文雄
教授 保坂 亨 教授 安藤 聡彦

学位論文要旨

本研究は、これまで臨床研究者として教育実践の場に参加するなかで見出されてきたまなざしの特徴や作用に着目することをおして、教師が子どもを見るということの実践的意味の奥行きを明らかにしてゆくことをめがけている。

子どもとの直接的な相互作用の場において示される教師の表情や言動であれ、そこに教師が子どもをどう見ているかが現れている限り、ここではそれを教師の子どもに対するまなざしと呼んでいる。人が人に向けるまなざしは、外に向かって現れるものであるがゆえに、そのまなざしを向けられた相手も、そのまなざしに立ち会う人びとも、その人が相手をいかに感じているかを感じ、なんらかの作用を受けることになる。こうしたまなざしの特徴や作用に着目するとき、教育実践はまなざしを媒介にしてたえず社会的に構成され、再構成されているものと見なすことができる。本研究は、まなざしを媒介にした教育実践の社会構成主義的な捉え直しを試みるものである。

なお、本研究において、「見るということ」は人が人を見るというところに生起する出来事の総体を意味する包括的な概念として、「まなざし」という言葉は人が人を見る行為の現れの特徴や作用を意味する分析的な概念として用いている。

序章では、まなざしの諸特徴や諸作用に着目することをおして、教師が子どもを見るということの複雑な生成過程を明らかにする以下のような課題を提起している。

教師が子どもに向けるまなざしにはどのような様式の違いがあるのか。そこでのまなざしの様式の違いは、教師の子どもに対する関心の向け方や、教師の実践的思考の過程や、教室を拠点とした多様な関係の生成にどのような影響をもたらすものなのか。現代の社会と教育の状況のなかで、教師が子どもに向けるまなざしや、保護者や社会の市民が子どもに向けるまなざしはどのような変容を被りつつあるのか。現実の学校教育の制度の内側で、子どもに対する共感的・ケアリング的なまなざしを基盤にした学校文化を形成するためには、学校の教育実践を構成する諸局面においてどのようなまなざしの編み直しが必要になるのか。

第Ⅰ部で教育実践における教師の共感的・ケアリング的なまなざしの練り上げの過程を問題にした後、第Ⅱ部で教師のまなざしがもつ文化的・政治的な意味を問題にし、第Ⅲ部で現実の学校教

育の制度の内側でまなざしを土台にした学校文化の再編を問題にしている。本研究は、こうした問題に迫るために、各部において、教育実践への臨床的関与と理論研究の検討と実践事例の検討の三者を連関させることを、基本的な研究方法にしている。

第Ⅰ部では、理論研究の検討から、高瀬の「共感関係」、デューイの「共感的理解」、ノディングスの「ケアリング」論の検討をとおして、共感的・ケアリング的なまなざしが固有の他者とのあいだの関係の生成のなかでの他者への関心の向け直しの過程を含むものであることを明らかにしている。また、まなざしの質的差異や相互性に自覚的な教師たちの実践事例の検討から、教師がロングスパンで子どもを見るということには、教師自身も葛藤しながら、子どもの自己形成の葛藤や願望に迫るために連続的に関心に向けることで子どもに対するまなざしの練り上げがあることや、教師のまなざしのあり方を子ども自身も感じていることや、子どもの現在の葛藤を捉えるためにその子どもを多角的に捉えることで教師は自身のまなざしを練り上げていることを見いだし

ている。

第Ⅱ部では、まなざしの文化的・政治的な意味を見いだすために、まず、理論研究の検討から、まなざしの媒介作用に着目することで、そのネガティブな意味が強調されるまなざしの権力作用、反対にポジティブな意味が見いだされるまなざしの再編作用を位置づけている。クリティカル・ペダゴジーやナラティブ・セラピーの理論を検討するなかで、現代の支配的なまなざしが個体還元的・尺度準拠的・欠損検出的・技術主義的な傾向を強めていることを明らかにしている。さらに、三つの実践事例の検討をとおして、いつのまにか人びとのあいだに浸透している支配的なまなざしの様式を互いに問い直し、新たな様式のまなざしを編み直しあうことの文化的・政治的な意味を明らかにしている。

第Ⅲ部では、ノディングスのケアリングを土台にした学校教育の構想や教師と子どもの関係を重視する実践知研究を批判的に検討したうえで、これまでの教育実践への臨床的関与のなかで見いだされてきた知見をもとにして、現代社会の支配的なまなざしが浸透する学校教育の制度のただなかで、共感的・ケアリング的なまなざしを土台にした学校文化の再編を行うためのヴィジョンを明らかにしている。

終章では、総合考察として、1)教職の専門性における教師のまなざしの自覚や省察、2)まなざしを媒介にした教育実践の社会構成主義的な捉え直し、3)文化的・社会的な境界を越える共感的・ケアリング的なまなざし、4)支配的なまなざしを再編するもうひとつのまなざしの関係論的な特質、5)支配的なまなざしともうひとつのまなざしの差異がもつ人格形成にとっての意味、6)学校を基盤にした教育文化の再編におけるまなざしの作用連関について言及している。

また、今後の課題として、教師のまなざしの自覚と省察に向けた教員養成のカリキュラムの研究、ひとつの学校に定位したまなざしの総合的・重層的な再編に関するモノグラフ的研究、デューイの教育学および倫理学における共感概念の再検討、これからの教育実践への臨床的関与の四つをあげている。